

山口県徳山市大字大島方言の待遇表現

中川 健次郎

I. はじめに

- (1) 調査対象地：大島地区は、県東南部の瀬戸内海沿岸に位置する周南商工業都市徳島市の東南部から南西に突出した鯨の尾の形をした大島半島の中央域を指す。市中央部まで約13.4km、面積約9,457km²、人口約1,100人の11集落から成り立つ地区で、山林に富み、石油基地の一部も持つ、東は下松市笠戸湾、西は徳山湾に臨む細長い集落である。かつて第一次産業従事者中心の約3,000人の人口は、大戦後、減少し、交通手段も小舟や徒歩から今は、マイカー、バス、自転車などへと変り、約60%の人々が通勤する。近郊には団地も作られ、現在の新しい集落の人々との交流もなされている。
- (2) 調査年月日：1996年9月21日及び11月23日
- (3) 話者：梅岡チエ子氏 1928年生（69才）無職
- (4) 調査者・調査場所：中川健次郎が、その知人—東本浦の東サツエ氏宅で行う。
- (5) 調査方法：当該調査表による質問調査。話者の相手として、女性（82歳）、男性（73歳及び66歳）の3名を設定し、質疑補充に努めながら調査した。
- (6) 表記方法：アクセントは高音部は棒線を付した。話者の説明は（ ）で示す。

II. 調査結果

1-1 対者敬語

- (1) A おまえは アンター （主語の「は」は前に続けて長音となる）
元気かね カワリャーナイカネ
B あなたは マー （アンター、アンターマーともいう）
元気かね ゲンキデエーネー
C あなたは マー （アンター、アンターマーともいう）
元気かね ゲンキデーデスネー （市中心部のオゲンキデアリマスイノタの
ノタ・ノータ・ネータ・ネンターことばは、まず使わない）
- (2) A あしたは アシター （アヒターともいう）
家に居るか オルカネ （オルカノとも）
B あしたは アシター
家に居るか オッテカネー （オル?とも）
C あしたは アシター
家に居られますか オッテカイネー （オッテデスカイネーとも。ゴザイタクデ
スカやオイデゴザイマスカなどは聞いたこともない）
- (3) A あした アシタ （アヒタともいう）

行くか イクン (イクノーとも。県西部特有のイクソーあるいはイクホー
は使わない)

B あした アシタ

行きますか イッテカネ (イッテカイネとも)

C あした アシタ

行きますか イッテデスカ (イッテデアリマスカという山口県特有のアリマス
ことばは使わない)

(4) A 温泉に オンセンニ (オンセンエ、オンセンイとも)

行かないか イカンカネー (イコーイネとも)

B 温泉に オンセンニ

行かれませんか イッチャーナイ

C 温泉に オンセンニ

行かれませんか イキマショーイネ

(5) A しますか シテデスカ (年長、目上ともに大差なく使う)

B されますか シテデスカ

(6) A 見ましたか ミター (ミタカイネとも)

B 見ましたか ミチャッター (ミテデシターとも)

(7) A ゆうべは何時に寝ましたか ユービャーイツゴロネチャッター (何時にはナン
ジゴロとも)

B ゆうべは何時に寝ましたか ユウベワチンジーネチャッター

C 寝てください ヤスンデクダサイ (ネテクダサイと改まって共通語表現でも)

(8) A どこに行っているか 下コエイッチョルン (イッチョルノとも)

B どこに行っていますか 下コイイッチョッテン

C どこに行っていますか ドコイイッチョッテン (イッチョッテンカイネともい
い、進行形チョルの普及が大)

(9) A どうぞ食べてくれ ドードタバサンネー (隣接地区嵯島ではタバサンネー)

B どうぞ食べてください ドードタバサンネー

C どうぞ食べてください ドードオアガリナサンサー (時にオアガリナサイマセ
とも)

(10) A その写真を私に見せてくれないか ソリョーチョイトミセテー (写真を私にと
分かっているものとして表現される)

B その写真を私に見せてくださいますか ソノシャシンワタシーミセテョーダ
イネ、ミセテクレサンネ、ミセテーとも)

C その写真を私に見せてくださいますか ソノシャシンワタシニミセテモラエマ
センカ (対等か年長者には省略が多い)

が、目上にはまず省略しない)

1-2 第三者敬語

- (11) A あしたは家に居るだろう アシターイエー $\overline{\text{オ}}\text{ッテジャローヨ}$ (アヒターとも)
B あしたは家に居るだろう アシターイエー $\overline{\text{オ}}\text{ッテジャローイネ}$ (A、Bともに同一の表現をする)
C あしたは家におられるでしょう アシタワオーチイ $\overline{\text{オ}}\text{ッテジャローネ}$ (アヒター $\overline{\text{オ}}\text{ッテデショーネ}$ とも)
- (12) A 居なかった $\overline{\text{オ}}\text{ッチャーナカッタヨ}$ (ルスジャッタヨとも)
B 居なかった $\overline{\text{オ}}\text{ッチャーナカッタヨ}$ (ルスジャッタヨとも)
C 居なかった $\overline{\text{オ}}\text{ッチャーナカッタヨ}$ (ルスジャッタヨとも、A、B、Cともに同一の表現をし、差はつけない)
- (13) A そう言った ソーユーチャッタヨ (ソネーとも)
B そう言った ソーユーテジャッタヨ (年長、目上、男女差もほとんどなく対等意識で使う)
- (14) A 今そこに行っていた $\overline{\text{イ}}\text{マーソコイイッチョッタヨ}$
B 今そこに行っておられた $\overline{\text{イ}}\text{マソコイイッチョッテジャッタ}$
C 今そこに行っておられた $\overline{\text{イ}}\text{マソコ}$ $\overline{\text{イ}}\text{ッチョリサイタ}$ ($\overline{\text{イ}}\text{ッチャリサイタ}$ ともいい、完了継続表現のチャル、チョル表現は大)
- (15) A 友達が来ている トモダチガキ $\overline{\text{キ}}\text{ョルンヨ}$ (キ $\overline{\text{キ}}\text{ョッテヨ}$ ともいう。県域大半で使うチングー(親友)は使わず、花子のばあいは、 $\overline{\text{ハ}}\text{ナハー}$ がとも $\overline{\text{ハ}}\text{ナチャンガイマキーサイテ}$ などとも使う)
B 来ている $\overline{\text{キ}}\text{ョッテヨ}$
C 来ている $\overline{\text{キ}}\text{ョッテヨ}$ (A、B、Cともに同一表現が多い)
- (16) A 仕事をしている シゴト $\overline{\text{シ}}\text{ョッテヨ}$ ($\overline{\text{シ}}\text{ゴト $\overline{\text{シ}}\text{ョールイネ}$ とも、 $\overline{\text{シ}}\text{ゴト $\overline{\text{シ}}\text{ョールヨ}$ とも)$$
B 仕事をしている シゴト $\overline{\text{シ}}\text{ョーッテヨ}$
- (17) A 見せてもらった ミセテモ $\overline{\text{ロ}}\text{ータ}$ (ミセテモ $\overline{\text{ロ}}\text{ータヨ}$ とも)
B 見せてもらった ミセテモ $\overline{\text{ロ}}\text{ータ}$ (ミセテモ $\overline{\text{ロ}}\text{ータヨ}$ とも、Aと同一)
C 見せてもらった ミセテモ $\overline{\text{ロ}}\text{ータイネ}$ (ミセテイタダクは使わない)
- (18) A 見せてくれた $\overline{\text{ミ}}\text{セテクレチャッタヨ}$
B 見せてくれた $\overline{\text{ミ}}\text{セテクレチャッタ}$
C 見せてくれた $\overline{\text{ミ}}\text{セテクレチャッタ}$ (A、B、Cともに同一の表現をとり、イタダクやオクレジャッタなどとは聞いたこともない)
- (19) A 私にくださった ウチニクレチャッタ

- B 私にくださった ウチニクレチャッタ (A、Bともに全く同一表現)
- (20) A いただいた モロータ (モロータイネとも)
- B いただいた モロータ (モロータイネとも。A、B同一表現をする)

II 謙譲表現

II-1

- (21) A 私も ウチモ (「元気だよ」はマメナイネーあるいはカワリヤーナイネなど
 といって続ける)
- B 私も ウチモ (「元気だよ」はゲンキーネという)
- C 私も ワタシモ (「元気だよ」はゲンキデスイネといい続けていく)
- (22) A 十分に食べました ジューブンニヨバレマシタ
- B 十分に食べました ジューブンニヨバレマシタ (A、B同一表現)
- (23) A 持ちましょう モッチャゲマショーイネ
- B 持ちましょう モッチャゲマショー
- (24) A 待たせたね マタセタネー (話し手が男性のばあいは、語尾をノーという)
- B 待たせたね マタセタネー (A、Bともに共通の表現)
- (25) A 駅で待っているよ エキデマッコリイネ
- B 駅で待っていますよ エキデマッコリイネ (A、Bともに)
- C 駅で待っていますよ エキデマッコリマスヨ
- (26) A 言ってくれ ユーチョッテヨ (「すぐ帰るからと」スグイヌルケートに続く表
 現であり、語尾はネも使う)
- B 言ってくれ スマンケドユーチョッテネ (「済みませんが」と付け足す事があり、雰囲気による)
- C 言ってくれ イツテクダサイ (改まり、共通語表現をとる)
- (27) A これをやろう コリョーアギョー
- B これをやろう コリョーアギョー (A、B同一表現)
- C これをあげましょう コリョーアゲマショー

II-2

- (28) A 買ってやった コーチャッタ
- B 買ってやった コーチャリマシタイネ
- C 買ってやった コーチャリマシタイネ (B、Cともに共通する)
- (29) A 主人はもう帰っている ウチノワモーモドッコリイネ
- B 主人はもう帰っている ウチノワモーモドッコリマスイネ

Ⅲ 丁寧表現

- (30) A 行くよ イク^ーイネ (イクヨと共通語表現も)
B 行きます イキマ^スイネ
- (31) A 寒いね サブ^イネー (サム^イネーとも)
B 今日は寒いね キョー^ワサム^イネ
C 今日は寒いですね キョー^ワサム^イデスネ (共通語表現をとり、オサム^ーゴザ^イマスとも)
- (32) A 居るよ オ^ルイネ
B 居ます オ^リマス (「在宅する」のザイタクスルなどの漢語は使わない)
- (33) A よかったねえ ヨ^カッタネー
B よかったですねえ ヨ^カッタデスネー
C よかったですねえ ヨ^カッタデスネー (B、C共通で、A、B、Cともに共通語表現をとる)

Ⅳ 人間関係に応じた待遇表現

Ⅳ-1 特定表現の待遇表現

- (35) その角を曲がって右へ行くと ソノカドオミギ^ーマガッテ (ミギ^ーオレ^イクトとも)
(36) とんでもない 下^ンデモナー (はじめにイーヤ^{ノー} (否) と付けることも)

Ⅳ-2 多人数場面の待遇表現

- (37) 引き受けましょう オヒキウケイタシマ^ショー (ヒキウケヤ^ショーとも。はじめに「仕様が無い」のシヨ^ーガナーを付す事もある。)
(38) 今度の旅行には参加者が少ないので、みなさん参加してほしい コンドノリョ^コーニャ^ーイキテガスクナー^ケーミンナイ^ショイ^イコ^ーイネ

Ⅳ-3 位相による待遇表現

- (39) 1 お寺の住職さん A オハヨーゴザ^イマス
B ドコエオイデマスカ
2 校長先生 A オハヨーゴザ^イマス
B ドコエオイデマスカ
3 見知らぬ年輩の男性 A オハヨーゴザ^イマス
B 下^コエオイデマスカ
4 見知らぬ年輩の女性 A オハヨーゴザ^イマス
B 下^コエオイデマスカ (1～4、全部同じ表現をする)

が、時にアクセントの位置を変えることがある)

- 5 顔見知りの年上の男性 A オハヨーゴザイマス
B 下チラエデスカ
- 6 顔見知りの年上の女性 A オハヨーゴザイマス
B 下チラエデスカ (A、Bともに同じであり、男女
の差はない)
- 7 10歳ほど年下の見知らぬ男性 A オハヨーゴザイマス
B 下チラ
- 8 10歳ほど年下の見知らぬ女性 A オハヨーゴザイマス
B 下チラサマエ
- 9 同級生の男性 A オハヨー (「寒いね」サムイネーなどの時候のあいさつこ
とばを述べるのが大半)
B ドコイイケン
- 10 同級生の女性 A オハヨー (9と同じ時候のあいさつを加えることが多い)
B 下コイイッテ
- 11 10歳ほど年下の顔見知りの男性 A オハヨー (11~14は、ほとんど共通)
B 下コエイケン
- 12 10歳ほど年下の顔見知りの女性 A オハヨー
B 下コエイクンネ (下コエとも)
- 13 近所の中学生の男の子 A オハヨー
B (ドコエ)
- 14 近所の中学生の女の子 A オハヨー
B (ドコエ) (「行く」は省略する。なお自転車に
よるスピード通過が多く、B表現をするばあいはほとんどない。)

III まとめ

住民は、中世後期から生活の場として居住し始め、大島半島の記録は、近世初期の毛利公文書に初めて見られる。大半が樵、小作農、漁師たちで構成され、その土着地であった。大島半島西端の岬を「漁人鼻」(リョードバナ)と呼び、「板子一枚下は地獄」の身の意識は、連帯感を生み、上下差別の薄い、対等意識を生み出した。ために、身分の上下、男女差の薄い、協力的で親密な暮らしの伝統を保たせた。

また、近世徳山支藩に所属しながらも、徳山城下町から半島へ南下の途中、わずか8kmの幅の萩本藩の支配地が切断したために、格式ある防長方言の一つ、「あります」「のんた」などの徳山方言を意識させずに暮らさせた。

(なかがわ けんじろう)